

平成29年度 独創的研究助成費 実績報告書

平成 30年 3月 28日

報告者	学科名	保健福祉学科	職名	准教授	氏名	周防 美智子
研究課題	児童生徒の抑うつ状態と問題行動 ―追跡調査（最終年）による検証―					
研究組織	氏名	所属・職	専門分野	役割分担		
	代表	周防美智子	保健福祉学科・准教授	児童精神保健	調査・分析	
研究実績の概要	<p>1.研究目的・方法</p> <p>近年の児童生徒における問題行動の増加を究明するためには、問題行動の要因を明らかにすることが急がれる。児童精神医学領域では、子どもの問題行動を抑うつの視点から検討することが必要だと指摘している。2014年度から、児童生徒（小・中学生）の抑うつ状態と問題行動、環境など背景の関連を研究し、抑うつ状態と問題行動の改善に向けた支援を検討するための追跡調査（同小中学校）を開始した。</p> <p>調査は、Birlson の子ども用自己記入式評価尺度（DSRS-C）と、教師の行動評価（①行動が年齢より幼い、②座ってられない落ち着きがない、③やっではいけないことをしても悪いと思わない、④暴言や暴力がある、⑤物を壊す、⑥学習意欲がある、⑦休み時間の友人交流がある、⑧学校生活全般に元気がある、8項目）を質問紙で行った。DSRS-Cは、フルスコア36点でカットオフスコア16点以上を抑うつ状態とする。対象は、A 県3小学校の児童1年生から6年生1,698人と1中学校の生徒1年生から3年生791人および担任79人である。調査は、6月と12月に2回実施した。分析は分析ソフト（SPSS20.0）にて、有効回答（小学生1回目1,563人・2回目1,668人、中学生1回目774人・2回目773人）を対象に行った。本研究は、岡山県立大学倫理委員会の承認を受けている。</p> <p>2. 結果</p> <p>小学生の抑うつ状態は、全児童の1回目は12.8%に、2回目は12.6%に見られた。1・2回とも性別や小学校の差はほとんどなかった。1年生は2回目で抑うつ状態が高く、追跡調査では、今回と同様に高くなる傾向が見られた。過去には、2倍になる年もあった。</p> <p>中学生は、1回目は全生徒の15.8%が2回目は18.0%が抑うつ状態であった。中学生も過去と同様に、1年生は2回目で抑うつ状態が高くなる状況が見られた。また、男子より女子が高くなる傾向も同じであった。</p> <p>問題行動を、抑うつ状態の有無で比較すると、抑うつ状態の小学生は抑うつ状態でない児童の約2～3倍の出現である。中学生においては抑うつ状態の有無にかかわらず問題行動の出現はほぼ同じであった。小学生と中学生では抑うつ状態による行動の表出に違いが見られる。また、過去と同様に、昨年度抑うつ状態であった児童生徒の約半数が今回も抑うつ状態を示していた。さらに中学においては、1・2回とも抑うつ状態を示す生徒は、1回目の6～7割という高い値であった。小・中学生の抑うつ状態と行動の相関分析を、表1に示した。</p>					

※ 次ページに続く

表 1 抑うつ状態と行動の相関分析

		行動①	行動②	行動③	行動④	行動⑤	行動⑥	行動⑦	行動⑧
抑うつ状態 1回目	小学生 N=1,563	-.047	-.013	-.086*	.090**	.011	-.015*	.012	.062
	中学生 N=774	-.025	.023	-.032	.078*	.020	-.078*	-.038	.357
		行動①	行動②	行動③	行動④	行動⑤	行動⑥	行動⑦	行動⑧
抑うつ状態 2回目	小学生 N=1,668	.171**	.142**	.115**	.134**	.117**	.126**	.136**	.065**
	中学生 N=772	.056	.057	.058	.088*	.056	.063	.128**	.065

表内の数値は相関係数を示す。**p<.01、*p<.05

小学生では、抑うつ状態と行動の相関は1・2回目とも昨年度と同じ状況が見られた。中学生においては、2回目の状況がほぼ同じであった。また、環境など背景（経済状況、児童虐待、家族の課題、いじめ、発達課題、学力課題）が、抑うつ状態や問題行動に影響しているかについて検討したところ、小学生の抑うつ状態と問題行動に、家族の課題（父母の不和、養育者の精神的不安定など）といじめ（からかいや仲間外れ、悪口など）が関連していることが示唆され、中学生になると学力課題も加わることが明らかとなった。

3. 考察・今後

小学生、中学生とも入学時より、2学期以降に抑うつ状態が見られることが明らかになった。抑うつ状態の影響による行動の表出は、年齢が低い小学校に見られ、中学生になると問題行動よりも抑うつ気分、意欲の低下などの状態が見られることが示唆された。また、性差についても中学校以降に現れ、医学的な抑うつ状態の特徴を表していた。さらに、抑うつ状態が継続している児童生徒が存在し、校内におけるメンタルサポートが重要であると考えられる。

また、抑うつ状態と問題行動に影響する背景として、家族課題やいじめによる友達の課題が影響していることが示唆され、環境調整の重要性が明らかとなった。

今後は、調査の分析、検討をさらに深め、学校現場における問題行動やメンタルヘルスの課題の改善に向けた支援方法を構築したいと考える。

研究実績
の概要

成果資料目録

平成30年度 公衆衛生学会発表、学校保健学会投稿予定